



Subaru

男声合唱団 ニュース No.570

'16. 8. 6

戦争を語り継ぐ特別企画

バイカル湖とモンゴル合唱交流の旅

2016年7月14日～7月21日

(その2)

スケジュールと訪問都市・主な出来事

4日目：7月17日（日）モンゴルからロシアへ国境越え モンゴル出国とロシア入国
（バスの旅）・シベリア鉄道夜行列車に乗りイルクーツクへ（鉄道の旅）

早朝 5:00 専用バスにてテレルジを出発し、午後モンゴルを出国し、夕刻ロシアへ入国。深夜ウランウデからシベリア鉄道の夜行列車に乗りイルクーツクへ行く長い旅となりました。



テレルジを出発し、国境(出国管理局)へ向けての1本道のあまり舗装されていない国道を北上する。ウランバートルから延々と続く放牧地の高原地帯。突然第2の都市ダルハン市のビル群が現れ、そこを通過し、第3の都市イグチー市へ。9:30 イグチー市の「コンフォートホテル」で遅いレストランバイキングの朝食。1時間後出発。10:30 から12:30 の2時間セレンゲ県を走る。ロシアとの国境セレンゲ出国管理局。約1時間(13:30～14:30)でモンゴルの出国審査を終了する。次いでロシア入国管理局での入国審査が17:40までかかる。(先に審査している入国車が数台待っているためと融通の利かないロシアの官僚主義的行政の対応のためか?) 通訳ナランさん・専用バスの運転手さんと滝澤さんのご奮闘もあってようやく入国審査を終え、ウランウデ(ロシア)へ入国する。本日のバス走行距離は約750km。レストランで夕食後、22:20 ウランウデ発のシベリア鉄道(夜行・寝台列車)に乗り、イルクーツクへ。



シベリア鉄道は4人一室2段ベッド。昨年はウラジオストックというシベリア鉄道の主要駅からの乗車であったが、今年はウランウデという比較的小さな駅から乗ったこともあり、客車自体がやや小さく、したがって4人1部屋のスペースも小さく大変窮屈なベッドでの就寝となった。朝7:15イルクーツク着の約9時間の汽車の旅であった。

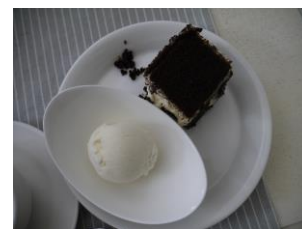
前日は国境越えの朝5時から16時間、750kmものバスでの長旅の疲れからか、旅人たちは寝台車のベッドでかなり熟睡できたのでは？事故もなく、また病気になる人もなく、無事ロシア・イルクーツクの朝を迎えることとなった。

●「シベリア鉄道に乗ってみて」(吉川の感想)

時速100km程度の旅客夜行列車での旅は、広大なシベリアの森林の中に延々と伸びるレール上を走る車輪の大きな音と共に、相部屋の友人と語りながらゆっくり流れる時間の中にいる。ウオッカを飲みながら(できれば)・・・日本人には旅客輸送のイメージが強いシベリア鉄道は開通当初からロシアの貨物輸送の根幹をなし、ロシアおよびソ連経済において重要な役割を果たし続けてきた。飛行機と自動車の発達によって人的輸送の役割は減っているようだが、旅客用としてみた場合は、日本の新幹線や特急列車のようにスピードを買う列車旅とはまた違った良きものを乗る人たちに提供しているのだろう。

5日目：7月18日(月) イルクーツク到着、午前中専用バスにてイルクーツク見学。ロシアのレストランで昼食後、本日の寄宿先サンホテルへ。3時間の自由時間(各部屋での休憩・午睡)のあと、18:00～20:00リハーサル合唱レッスンを行う。事前に17:00より1時間かけて、相根さかゑさんの指導のもとアルトのパートレッスンを特別に行う。20:00～22:00レストランにて夕食(定番のロシア料理)

●ロシア料理：魚料理がメインディッシュ(バイカルで獲れる淡水魚・オムリ) (ホテルレストラン・ローカルレストランでのランチの定番のロシア料理)



イルクーツクに到着後、専用バスにて、本日の投宿先のロシアのホテル(サンホテル)へ。朝食をいただき、その後専用バスに乗って、午前中イルクーツクの観光案内に赴きました。

専用バスのガイドは、才能豊かな若いロシア女性・オルガさん。彼女の流暢な日本語に感心！

彼女はイルクーツク国立言語大学日本語学科卒業。小さい時から日本語と日本に興味を持ち、高校卒業後の進路について「おもしろいことをしたい」「日本語はとても不思議できれいな言語」と5年間の言語大学在学中に日本へ・イルクーツク市と姉妹提携している石川県金沢市にホームステイ。卒業後、栃木県の宇都宮大学へ半年間留学。観光会社での日本人のためのツアーガイド、現在自分の会社でガイドをして頑張っている。夏以外は日本語と英語の翻訳を仕事にしている。英語・日本語・ロシア語の3か国語を操る才女。アルトの軟らかで静かな語り方、くせのない流ちょうな日本語で案内・解説をしてくれました。

石川県金沢市とイルクーツク市は50年前に姉妹都市提携を行い、毎年高校生や大学生を数名ずつ交換留学の交流をしているようで、このような若い通訳・翻訳家が育っていることは両国の平和友好にとって喜ばしいことだと感じました。

●いろんな顔を持つイルクーツク市（バイカル湖に最も近いシベリア地方の中心都市）

（1）地理：イルクーツ川とバイカル湖から流れ出るアンガラ川との合流点にイルクーツク市がある。イルクーツク市のシンボルはバイカル湖。

シベリア鉄道イルクーツク駅は1898年8月16日に開通。湖に沿って鉄道が走る。当初鉄道を敷く土地面積がなく、冬場は凍った湖上に鉄道を敷き、夏場は船を置いて、その上に線路を通して列車を通すことも行った。時代の要請で、鉄道の需要が高まるとともに別の支線を敷設することとなった。

イルクーツク市の人口は約60万人、主にアンガラ川の兩岸を中心に暮らしている。

イルクーツクの気候：大陸性気候、亜寒帯冬季少雨気候。夏場の6月から8月の3か月は23度・11度と湿気の少ないさわやかな夏の気候となる。しかし1月の平均気温最高マイナス14度・最低マイナス24度の猛烈な低い気温！想像を絶する寒さである。



イルクーツクの象徴:コサックの像

（2）コサックのつくった町：イルクーツク

17世紀までのロシアは東はウラル山脈までが領地であった。ウラル山脈を越えてシベリアは不明の地であったが、くろてん（黒貂）の毛皮を確保するために、当時の皇帝はコサックを派遣した。1661年20人の精鋭のコサック軍がイルクーツクに着き、現地の土着の敵や動物から身を守る小さな要塞を作って、この地で活動を始めた。20人から起こった町は100年

後シベリアの「首都」の役割を果たす町となり、現在60万名の人口。町にはコサックのイメージとしての大きな銅像（立像）がアンガラ川の一角に街を見下ろすように誇らしげに立っている。

（3）学園都市：イルクーツク

小学校・中学校・高校までは同じ学舎で学ぶ「一貫教育?」。1918年イルクーツク総合大学が始まり。総合大学のほか、言語大学・教育大学・農業大学・経済大学がある。別格として医療大学を持つ。学生数は人口の12%（7万人あまりか?）

（4）木造と石造り建築の記念物が多い町：イルクーツク

まわりがシベリアの大地・大木の樹々が育つシベリアの地に在って、イルクーツクの建物は木造の建物で始まった。多くの古風な木造建築が軒を連ねている。旧商人邸宅・観光センター・旅行センター等。しかし火事があるため赤レンガの石づくり建築が多くなってきた。なお、個性的な木造建築は正面は石造りにして火災の延焼を防ぐ工夫を施している。



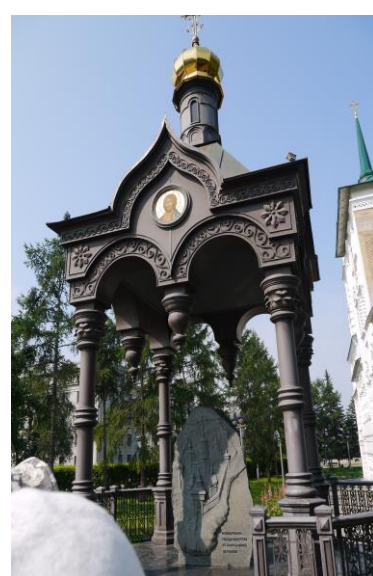
(5) 中心街は世界的に著名な人々の冠通り

イルクーツク市の中心街の道路にはソ連時代のまま、レーニン通り、マルクス通りの名がついたまま。ロシアの文豪チエホフが、19世紀全ロシアを旅行し、イルクーツク市を訪問。「シベリアのパリ」と絶賛。その記念に「チエホフ通り」の名がついた通りがある。またこの街はサンクトペテルブルグ市に似ている。

(6) ロシア正教会の街：イルクーツク

ロシア正教会の古い石造建築が点在するイルクーツク。「スナメンスキー大聖堂」。豪華絢爛たる「ハガヤブレシンスキー聖堂」。真っ白な壁と鮮やかな緑の屋根が特徴的な「スパスカヤ教会」。(東シベリアで最も古いレンガと石でできた建物です)。

スパスカヤ教会のすぐ横には、第二次世界大戦の戦没者を祀った「永遠の火」が設置されています。このような「永遠の火」は、モスクワをはじめとする都市にも設置されていて、この火はずっと消えないようになっています。



(7) 「デカブリストの乱」で120名がシベリア流刑された土地：イルクーツク
シベリアはロシア中央から囚人や政治犯の送られる流刑地。1825年12月4日「デカブリストの乱」を

おこした貴族たちはイルクーツクに流刑された。ロシア語で12月を「デカブリ」という。また「デカン」は「デカメロン」に通じ、自由の意に連なる。流刑された貴族たちは、イルクーツクで、教育的・文化的影響を与え、農民の子供たちに読み書きを教え、ミサで歌を教え、ロシア中央から取り寄せた本を与えた。現在も「デカプリスト博物館」のなかで、彼らに感謝の気持ちを表すミサが行われている。



（８）「コルチャーク提督」像

日露戦争・第1次大戦時のロシア軍首脳の一人。1918年ロシア革命勃発、10月革命・内戦中の白軍の総帥。赤軍との戦いに敗れ銃殺される。ペレストロイカが始まるとともにロシアの歴史上の人物評価が変わり始める。ソ連時代はソ連政権の主たる敵の一人。ここ数年、価値の再評価が行われつつあり、歴史を客観的にとらえ、単に白か黒かに色分けしないようになってきたとのこと。

なお、「コルチャーク提督」像の足元には白軍と赤軍の2人の兵士が銃を交えて戦っている姿。「二度と同じ民族が、国民が銃を交えることのないように！」という意味が込められています。」とのガイドの解説（「異議なし！」）

（９）石川県金沢市と姉妹都市協定を結ぶ。（1967.3.20）

相互に学生（高校生等）や職員の留学や研修交流が行われている。また研究交流や音楽交流も ongoing であり、地方都市間での文化交流や友好親善の効果を上げている。

6日目：7月19日(火) 現地イルクーツクのロシア民謡合唱団との合唱交流 大成功！ 日本の合唱団に万雷の拍手と歓声！

今回のロシア訪問の目的の一つである、現地のロシア民謡を歌っている合唱団と歌での交流を成功させる・・・そのために午前中3時間かけて、ホテルバンケットにて、本日のコンサートのための4度目のリハーサルレッスンを行いました。

14:00より演奏会ができるサンホテルのホール(バンケット)にて現地のアマチュア合唱団「イルクシャノチカ」と合唱交流を行いました。

最初に、招待側からイルクーツクの「バイカル日本友好協会」のトップのウラジミールさんが挨拶をされました。「日本からはるばるとイルクーツクを訪問され、当地の合唱団と交流されることに、感謝と歓迎の気持ちを込めて(ありがとう！)」

次にイルクーツク市観光課部長(女性)から歓迎の挨拶があり、藤後団長に花束が贈られました。



「今日は皆さんとお会いできたことをうれしく思います。皆さんがイルクーツクで合唱交流されることをうれしく思い、そしてロシアの歌をうたわれることに一層うれしく思います。人は一生歌を聞いたり歌ったりして生活しています。皆さんの歌を聞いて、うれしく感動することでしょう。今日のイベントで仲良くし、そして来年も再来年も仲良くしたい(再訪して欲しいの意)(笑いと拍手！)ありがとう！」

合唱団「イルクシャノチカ」から「歓迎の挨拶のうた」として、「小さなぐみの木」をロシア語で合唱(女声2部)。アコーディオン伴奏で。3番を女声ソロが歌い、途中から合唱。澄み



切った優しくも美しい6人の女声合唱。リーダーの女性から「シベリアに来ていただいてありがとう！歴史の長い、地球の真ん中にあるイルクーツクにまで来ていただいてうれしく思います！」と挨拶され、合唱団特製の写真入り名刺の束を藤後団長に渡されました。

コンサートは日本の訪問合唱団の演奏から始まりました。最初に藤後団長の熱いメッセージのこもった挨拶がありました。

(藤後団長の挨拶)

「ロシアの友人のみなさん こんにちはー(ロシアから日本語で「こんにちはー」

の返礼) 私たちは「合唱交流の旅」を2014年「ヴォルガ川下りの旅」、2015年「第2次大戦終結70年を語り継ぐ極東シベリア・旧満州とご当地のハバロフスク・ウラジオストック訪問の合唱交流の旅」に引き続き、今回第3弾として「バイカル湖とモンゴルの合唱交流の旅」が企画されたものです。(驚きの声と拍手！)

私たちは、ロシア民謡といえば「バイカル湖のほとり」がまず頭に浮かびます。戦後、ロシア民謡を随所に取り入れた映画「シベリア物語」。この中のロシア民謡を聞いて、その曲に魅せられて虜となり、「バイカル湖」は私の「心のふるさと」の一つとなりました(拍手)。そして、私たちににとって「バイカル湖」は羨望の土地です。(拍手)

暗い話になりますが、片や風光明媚なバイカル湖。他方、戦争によって悲劇の歴史が刻まれました。ご当地には日本軍の捕虜収容所があり、暗い歴史を抱え、多くの犠牲者を出した戦争の悲劇を決して忘れることはできません。私はかつて15歳でかつての旧満州開拓少年義勇軍の少年兵としてソ連軍にとらえられ捕虜となりました。幸いにも私はロシアとは銃を交えることはありませんでしたが、私の心には重いものが残りました。また日本の敗戦後幾多の辛酸をなめるといふ苦い過去があります。私は2度とこのような悲劇を繰り返してはならないということを人一倍感じています(拍手)

さて、私たちの旅の目的の一つは、多くの捕虜となって亡くなった方たちが祀られているご当地の日本人墓地を参り、鎮魂の慰霊をすることです。

そしていま一つの大きな目的は、ご当地のロシアのみなさん・合唱団のみなさんと歌の交流を通して“不再

戦・平和”をお互いに確認しあうことです。そして更なる友好の輪を広げていきたいと思えます。はなはだ簡単ですが(笑い！)挨拶いたします。」(大きな拍手！！)



滝沢さんの名司会のもと、オルガさんの通訳を通して聴衆のロシア人にも分かりやすい曲の紹介に共感の拍手が何度も起こりました。

指揮：本並美德先生 ピアノ：山下和子さん

一曲目「ロシアメドレー：①一週間②カチューシャ③トロイカ④ともしび⑤泉のほとり⑥カリンカ⑦黒い瞳」：

(解説)「私たちはいろんな合唱団と交流する中で、このメロディを歌って「ロシア」を感じています。ロシア民謡の各曲をメドレーにして監修したのは指揮者の本並です。」(拍手)

(演奏直後)「ロシア民謡メドレー」の各曲はロシアでもポピュラーな曲ばかり。合唱はそれぞれのパートが、何回もリハーサルレッスンを繰り返し行った成果もあり、各パートのハーモニーや曲の表現・声の出し方もこれまでにないほど良く完成された歌声となりました。聴衆からは大きな拍手と「ブラボー！」「オー」「ヘーイ！」の歓声が長く続きました。



二曲目：「聖なる湖バイカル」

(解説)「バイカル湖は日本の私たちにとっては、アムール河、ヴォルガ川と共にロシア民謡の聖地とみています。明日私たちはバイカル湖に船を出して、数々のロシア民謡とこの「聖なる湖バイカル」を歌うことを予定しています。」(拍手)

三曲目：「星よお前は」

(解説)「1960年、日本で働く人と働かせる人との間で闘いの、あるすざましい争いがありました。その戦いの中から、働く人たちが一緒に手を携え、口に託して歌った歌が生まれました。「星よお前は」です。」

(演奏後)、この曲想を理解していただけたか？静かで丁寧な拍手と感動の雰囲気流れました。

四曲目「おりづる」

(解説)「この曲はロシアの方も知っている方が多いと思います。日本の広島に原爆が落ちました。2歳で被爆した佐々木貞子さんが12歳で亡くなるまで、毎日のむ粉薬の紙で千羽鶴を折っていました。その話を教科書で知った当時のソビエトの子供たちが作った曲といわれています。1990年に日本人が採譜し、日本語を付けて合唱曲にしました。」

(演奏直後)この悲しくも切ない思いをソロで切々と歌われる古賀さん(福岡から参加)のうたごえに会場は静まりかえり、鎮魂の場となりました。歌い終わると同時に共感と感動の大きな拍手が続き「ブラボー！」の声が飛び交いました。

五曲目「花」



(解説)「来年でロシア革命100年になります。その時代に日本では初めて2重唱として「花」という新しい曲が歌われました。日本は4月上旬に桜が咲く美しい時期となります。その一番美しい時を歌った歌が「花」です。」

(演奏直後)この曲が最後ということもあって、またこれまで拍手が大きいことに元気を頂いて、「花」も明るく爽やかな声でよくまとまって元気な声で歌いました。私たちの心が届いたか、大きな拍手をいただきました。

アンコール曲：「ソーラン節」

最後に北海道民謡「ソーラン節」を合唱しました。歌と手拍子に合わせて、ねじり鉢巻きをした原さん(東京から参加)と古賀さんが舞台の前に出て、漁をする漁師の力づよい踊りを演じられ、会場は一気に明るい雰囲気分で歓びと意外な驚きに包まれ、終わると同時に大きな拍手と歓声が続き、「ブラボー！」があちこちから飛び交いました。

日本の合唱団は六曲を約30分で合唱しました。



第2部はロシアの若きバラライカ奏者(男性)とピアニスト(女性)の2重奏曲が3曲披露されました。

1曲目：「冗談の山唄」最初に作曲された時は別の楽器用で、バラライカのために作り直された曲。司会者(ガイド・オルガさん)の曲名紹介にまず笑いが起こりましたが、演奏と共にその軽快なリズム、速くて複雑なメロディ、ぴったりと合った2つの楽器の演奏。聴いていて気持ちも体も動かしたくなるコミカルな曲。若い演奏者にぴったりの明るくて元気な曲に終わったとたん拍手！「うおー！」「ブラボー！」



2曲目：「昔の靴？」短調の静かな曲想に変わる。ロシア独特の哀愁を帯びた感じの曲。ロシア民謡か？

3曲目：「カリンカ？」ガイドの翻訳がよくわからず、聴いた途端「カリンカ」だ！軽快な「カリンカ」のメロディがバラライカ用に編曲されて演奏された。聴衆にはおなじみの曲で、終わったとたん拍手と歓声がしばらく鳴りやまず、会場は歓びのあふれた幸せな雰囲気分に包まれました。



第3部は合唱団「イルクチャノチカ」の演奏が始まりました。

青色の民族衣装に身を包んだ魅力的な合唱団。6人の女声(主に2部)と1人のバリトン(男声)にアコーディオン伴奏で6曲のロシア民謡を合唱しました。

2曲目に「カリンカ」を、3曲目に「モスクワ郊外の夕べ」を私たちが日本語訳で歌っている曲そのものをロシア語で合唱しました。

「カリンカ」は普段私たちが歌っているその曲想を明るい声と軽快なリズムで、そしてソロをバリトンの男声が朗々と響く伸びやかな声で歌いました。最後

の「マリンカマヤ！」(オオ！！ブラボー！！の連呼！)

「モスクワ郊外の夕べ」は会場全体が合唱団の歌に合わせて小さい声と一緒に歌う雰囲気になりました。2番の冒頭をバリトンのしっかりしたソロの声が響きました。

この合唱団は雰囲気が大変明るくて、元気で歌っていることが楽しくてたまらないという気持ちにあふれている。聴いていても楽しくて元気をもらった雰囲気！それは「掛け合い」のうたパートを持つ選曲から来ているのだろう。

1曲目の曲名不詳「？」2つのパートで掛け合いながら声を交歓している。

4曲目「森の中のカナリア」:かけあいの奇声を出しあう愉快的な曲。実に楽しそうに歌っている！

6曲目「若者(マワダヤ・マヤワ)」:家庭の仕事をしないで、遊ぶことが好きな女性の歌。リズムが早く、掛け合いの楽しい歌。シニアには舌がもつれそうなスピード。一緒に歌いたくなる面白い歌。音程を合わせるよりもアコーディオンとリズムを合わせて楽しく歌おう！そんな雰囲気の歌。聴いていて実に面白い！

また「ガルモニ」という楽器で奏でる歌を1曲(曲名不詳)披露しました。結婚式で歌うお祝いの歌。ロシア民謡が持つ落ち着いた哀調のある雰囲気のスローテンポの1曲。ソロで口ずさみたくなる曲でブラボー！

最後に本並先生の指揮で「バイカル湖のほとり」を両国の合唱団と一緒に舞台上に立って合唱しました。明るくて元気な合唱団と交流できて実に楽しい一日となりました。固い握手とハグの姿が印象的でした。



16時よりティーパーティーが行われました。両合唱団の主要なメンバーの挨拶のあと、三々五々に歓談の場が持たれました。相根さんが「小さいぐみの木」をロシア語でロシア人合唱団の女性と歌われました。また古賀さんが「百万本のバラ」を原語でアコーディオンをバックに熱唱され、大きな拍手に包まれました。



7日目:7月20日(水) バイカル湖畔・リストビアンカの日本人墓地を合唱と献花で慰霊、ロシア民謡のふるさと・憧れの湖「バイカル湖」を遊覧しました。

前日、専用バスにてバイカル湖畔の町「リストビアンカ」の「バイカルホテル」に投宿しました。今日は、今回の旅の目的の一つである「日本人墓地」の墓参。イルクーツクから80km、リストビアンカで眠る「日本人墓地」を訪問しました。専用バスにてバイカル博物館・水族館を見学後、日本人墓地を訪問し、献花と合唱による鎮魂・慰霊をおこないました。

バスを降りてから歩くこと20分あまり、小高い丘の上に建てられた「リストビアンカ日本人墓地」には40人の亡き日本人が眠っています。藤後さんの「亡き日本人の方に黙とう！」の合図のもと、全員が哀悼の意の黙祷を捧げ、献花をし、伊藤さんの指揮、本並先生のアコーディオンで「花」と「さくら」を献歌しました。



そして、もう一つの目的:聖なる神秘の「バイカル湖」を自分の目と足で訪問しました。バイカル湖では船上の遊覧の人となり、「バイカル湖のほとり」「ゆたかなるバイカル湖」をはじめ、ロシア民謡特集で「うたごえ喫茶」の雰囲気味わい、昼食のレストランとなり、ビールとワインで乾杯しました。今回の厳しい旅程の旅の最後を満喫しました。

イルクーツク空港へ戻り、夕刻よりウランバートルへ飛び立ち、仁川空港に深夜に乗り継ぎ、翌21日(木)11:20 関空に無事到着。帰国しました。

